

社会学から視る継承日本語教育

柳瀬, 千恵美

<https://doi.org/10.15017/7388818>

出版情報 : 大学院からはじめる社会学研究 : 問いを鍛える作法 : 三隅一人教授退職記念論集, pp. 33-43, 2025-10-01. 三隅一人教授退職記念論集刊行委員会

バージョン :

権利関係 :



社会学から見る継承日本語教育

Education of Japanese Language as a Heritage Language from Sociological Perspective

柳瀬 千恵美

◎本章のねらい

他分野での対象を研究する際に社会学の視点を取り入れるのは、研究者それぞれの理由があることであろう。筆者の場合、問いの答えに行き詰まり、行き当たりばったりに社会学の概念や理論を取り入れることになったように思われるが、後から振り返ると、問いを鍛える過程において偶然ではなく必然であったのではないかと考える。宮野（2021）は、「いい問い」とは何かという問題を簡潔にまとめて、『いい問い』とは本質的な問い。そして本質的とは、『なぜその問いがあるのか』といった根源的な存在についてまで考えられているのか、あるいはその根拠を踏まえて考えられているかどうかのこと」と述べている（宮野 2021:30）。筆者はこの本質的な問いにたどり着くまでに紆余曲折し、その問いを求める中で社会学に近づいていったと言える。本章は、ある分野で研究する人が別の分野の視点を取り入れることと問いを鍛えることの結びつきを、社会学を例に示すことを目的とする。

◎とくに読んでほしい人

自らの興味関心をもとに学際的な研究を志向する学生

1. 研究テーマ

何を研究しているのですかという専門分野外の人からの質問に対して、多くの場合、一般に知られている説明不要な比較的大きい分野や領域を答えることが多いのではないかと思います。筆者の場合は「日本語教育」と答える。実際の筆者の研究テーマは「継承日本語教育」なのだが、この分野は日本語教育に携わる人にもあまり知られていない比較的新しいものである。言語学と教育学が中心となる「日本語教育」に「継承」が加わると、一気に社会学や心理学の要素が加わる。この学際的な新しい分野は、さまざまな切り口からのアプローチが可能である。どの切り口から研究を進めるかは、どういう問いを設定するか、すなわちどのような研究課題を設定するかと大きく関わる。次に、筆者のバックグラウンドと研究を始

めるに至った経緯を通して、筆者が継承日本語教育を研究するきっかけとなった最初の問いを説明する。

2. 最初の研究の問いと目的

筆者は国内の国際関係学を専攻とする大学学部を卒業後、教職等を経て、中国の北京へ移住した。北京での生活は20年あまりにわたり、その間中国人夫との間の二人の子どもの子育てに追われ、海外ならではのさまざまな問題に直面した。当時、インターネットが普及する前で、海外での子育てはもちろん、一般的な育児情報もその入手方法が限られていた。ある時偶然、互助を目的とする「中国人男性と結婚した日本人女性の会」（仮称N会）と出会い、情報交換以外にも、共通する諸問題の解決などで大いに助けられた。そしてN会の子どもをもつ母親らが集まり日本語と日本文化のための子ども会（のちに「ニッポン塾」と命名）活動を始めたのである。このようにして、筆者は子どもに日本語を身に付けさせる実践に励むようになり（子ども会への参加は短期だったが）、結果として大きな成果を得た。そうすると、N会の若い母親から「どうやって子どもの日本語ができるようになったんですか」という質問を頻繁に受けるようになった。しかし、筆者はその質問にうまく答えられなかったのである。「できるだけ日本語で話す」としか言えない自分に苛立ちを覚えた。その頃にはインターネットが既に普及し、内外の情報を入手できるようになっていたのであるが、ある時ネットで「継承語」という言葉と出会った。継承語とは簡単に言うと、家庭やコミュニティで子どもに継承する社会の非主流言語で、先住民の言語や移民の言語などが典型例である。その時、筆者は自分が子どもに実践していたのは継承日本語教育だったことを知り、それを専門領域の一つとする学会（MHB研究会、後にMHB学会）さえあることを知ったのである。

要するに、「海外の非日本語環境で、どうやって子どもの日本語ができるようになるのか」という問いが筆者の研究の出発点であり、それに対する答えを出すことが研究の目的であり、継承語教育に関わる人々に向けてその答えを提示したいと考えた。

3. 抽象的な研究の問いを具体化する

継承日本語教育をテーマに大学院で研究しようと決心したものの、研究計画を書く段階でまず躓いた。「海外の非日本語環境で、どうやって子どもの日本語ができるようになるのか」という問いはあまりにも抽象的過ぎて、説得力のある研究方法を思いつかないのである。

大学院入試の出願を目前に控え、遂行可能な研究方法をもとにした研究課題と研究計画を立てなくてはならない。つまり、抽象的な問いをより具体的な問いに、別の言い方をすれば、全体ではなく部分に注目するような問いにしなければならないと考えた。

継承日本語教育というのは日本語を継承する教育だから、教育の場として考えられるのはまず家庭、コミュニティ、学校、塾等である。そのなかで家庭は必要不可欠な最も重要な教育の場であるが、「家庭のなかでどのような教育が行われているのか」を問いにするのはやはり抽象的である。北京には現地の幼稚園や学校に通う子どもたちが日本語を身に付けるための教育機関がないため、N 会の母親が子どもの日本語と日本文化のためのニッポン塾を立ち上げたのであるが、そのニッポン塾を対象に具体的な問いを設定することにした。大学院の出願書類に書いたことは正確には覚えていないが、入学してまもなくMHB研究会年次大会の発表募集があり、そのために書いたものを以下に抜粋する。明確な問いは示されていないが、問いを立てるとすると、「ニッポン塾の継承日本語教育活動とはどのようなものか」となる。

〔問い〕「ニッポン塾の継承日本語教育活動とはどのようなものか」

北京では、母親が日本人で父親が中国人である日中国際結婚家庭の子どもたちのための継承日本語教育活動が、延べ十数年にわたって続けられている。その活動は時代とともに変化する環境やニーズに柔軟に対応変化し、「進化」してきたと思える。活動は現在、公的支援なし、専門の教師なし、実費のみ徴収で、純粋に親によるボランティアで成り立っている。こうした基盤の弱さは、これまでの研究では継承語教育にとって克服すべき問題であるとされてきたはずである。にもかかわらず北京でのこの活動は長期に存続しているばかりでなく、逆にその基盤の弱さが肯定的に評価されている側面すらある。ここに新しい継承日本語教育への展望、ひいては継承語教育一般にも適用できるモデルがあるのではないかと考える。親が創る北京での継承日本語活動の軌跡を総括し、21 世紀型継承日本語教育のあり方を考えることを目的とする。

〔答え〕

教育を専門とする学校で教師が教えることがより効率的であるかもしれないが、そうした条件が整わない世界各地で継承語教育を行うとすれば、より現実的で効果的な方法も検討されているのではないかと考える。さらにそれは、学校で行う継承日本語教育が抱え

る問題を解決する道筋を示すことができるのではないかと考える。ニッポン塾を例に、学校教育とは対照的に、小規模で臨機応変な自立型の生涯学習モデルのようなものが、グローバル化時代の継承日本語教育の一つの形態として考えられるのではないだろうか。

具体化された問いは、修士一年前期に実施した関係者に対するインタビューをもとに、実践報告の形で発表した。

課題 1) 興味関心が問いの出発点となることが多いが、多くの場合、「問い」というより「テーマ」に近く、抽象的である。あなたの興味関心のあるテーマから、研究遂行が可能な具体的な問いを考えてみよう。

4. 問いの前提を疑う

それに続く次の問いは「ニッポン塾の活動は継承日本語教育にどのような役割を果たしているか」と設定したが、その前提となったのは「ニッポン塾の活動は継承日本語教育に役立つ」という仮説である。そのため、日本語の習得程度をある程度総合的に見極めることができる年齢を中学生とし、中学生以上の子どもを持つ N 会の母親とその子どもを調査協力者として、ニッポン塾の活動に参加、不参加も含めて、ライフストーリー法のインタビューを実施した。ところが調査を一通り終え、データを整理し、分析を行おうとした時点で、大きな躓きがあることに愕然とした。データから「ニッポン塾の活動は継承日本語教育に役立つ」という仮説を証明できないのである。ニッポン塾に参加していても日本語の習熟度が低い子どももいれば、ニッポン塾に参加していなくても日本語を上手に使いこなす子どももいて、「ニッポン塾の活動は継承日本語教育にどのような役割を果たしているか」という問いに、答えを見出すすべが全くなかった。

問いを立てる際によくある失敗の一つとして挙げられる、「あらかじめ決まった答えを導くような、誘導尋問的な問いを立ててしまう。こういう問いは根拠のない前提に立っていて、結果として確証バイアスをもたらす。誘導的な問いを立てても、もともとこうだと思っていた答えを見つけるだけだ」(Mullaney & Rea 2022=2023:91) という指摘にぴったりそのまま当てはまる。研究対象の当事者が研究の問いを立てる場合に、往々にして陥る失敗とも言える。筆者もニッポン塾の活動が継承日本語教育に有益であるという信念をもって活動に関わっていたため、「ニッポン塾の活動は継承日本語教育に役立つ」という仮説を疑う余地の

ない前提として問いを立ててしまったのである。

課題 2) あなたが立てた問いの前提となっているものはなにか、その前提に思い込みはないか精査してみよう。

5. 多様な継承日本語教育の実践―「人それぞれ」

『人それぞれ』という言葉は取り扱いが難しく、安易にこれを言い出すと建設的な議論が成り立たなくなる危険があります。しかしながら、人それぞれと言いつつも絶対的に共通している部分は間違いなく存在し、その共通部分を対象とするからこそ『本質的』であり、それこそが『いい問い』であるはずです」(宮野 2021:38)。

調査データは、継承日本語教育の状況が「人それぞれ」、非常に多様であることを物語った。このデータに共通部分があるとはとても考えられなかった。データとにらめっこして一日一日が過ぎ、焦る気持ちでストレスが募った。

安斎・塩瀬 (2020) は、問題の本質を捉えるために必要な考え方として、素朴思考、天邪鬼思考、道具思考、構造化思考、哲学的思考という五つの思考法を紹介している。振り返ると、当時筆者が行き詰まりを打開するために使ったのは、道具思考だったと考えられる。道具思考とは、「問題の深堀りが進まなくなったと感じたときは、関連しそうな知識を参照したり、あえて異なる専門分野の考え方の枠組みを通したり、何らかの『道具』を通して別の角度から問題を捉え直してみると、また違った問題の姿が見え」(安斎・塩瀬 2020:71) てくるような考え方である。

筆者は問題が解決しないまま、継承語関連の文献を片っ端から読み漁った。そしてある時、ある論文に問題解決の手がかりを見出したのである。根川 (2012) は、ブラジル移民研究において、トランスナショナルな視点から 1930 年代サンパウロに住む日系移民の継承日本語教育を論じ、日系人の子どもたちが家庭のウチ・ソト、公教育機関と日系教育機関での言語・文化間の越境を日常的に繰り返していたと指摘する。他にもトランスナショナリズムの視点から論じた社会教育学分野の先行研究が参考となった。越境家族の日本と越境先を跨ぐ二元的なものの見方や心性(「越境ハビトゥス」)(額賀 2013)、空間だけでなく、言語間や言語カテゴリー間にも適用できる「移動」の概念(川上 2009)、「移動」より繰り返しを強調する「往還」の概念(志水 2013) などである。トランスナショナリズムという切り口から継承日本語教育を捉えると、「人それぞれ」なデータに共通する部分が浮き上がり、まさ

に違った光景が広がった。

また問題を捉え直した結果、調査データ収集の都合上、研究対象は日本語を継承する主体である子どもではなく、継承させる日本人母親に設定し直した。そして、母親が行う子どもの教育の実践は日本語教育に限らないため、日本語を含むマルチリテラシー育成という包括的な教育戦略を分析対象として、MHB 研究会年次大会での発表に応募した。以下は予稿集掲載文を「問い」と「答え」に編集したものである。

[問い]

国際結婚、中国への移住という二重のトランスナショナルな存在である日本人母親が実践した教育戦略は、「越境」という視座からどのように捉えられるか。

[答え]

子どもの現状と家庭のマルチリテラシー育成教育戦略を「越境」という概念を用いて、(1) 居住地、(2) 国籍、(3) 家庭、学校と外部生活空間、(4) 家庭内教科学習、(5) 学校外学習、(6) 家庭内文化空間、(7) 国境、(8) 友人関係、(9) 教育機関、の側面から分析を試みた。その結果、言語習得状況に対する満足度が高い家庭では、(1) 居住地、(2) 国籍、(3) 家庭、学校と外部生活空間、(6) 家庭内文化空間、(7) 国境。(8) 教育機関の面において「越境」性が高いことが明らかになった。

6. 問題の俯瞰と構造化/抽象概念の具体化

当時の発表内容を思い出すと、非常に稚拙で粗削りなものだったと恥ずかしくなるが、その後は不足点を見つけて、改善し補充する段階に入った。

筆者が切り口としたトランスナショナリズムの視点とは、すなわち日常的な「越境」という視点から対象を見ることである。その際、境界を越えるためには、境界が存在することが前提となる。そこで、「それぞれのシステムは、その環境に対する差異を生み出し、その差異を維持することをおしてみずからを形成し、維持している。またシステムはこうした差異を調整するためにその境界を役立てている」(Luhmann 1984=1993:24)) とする Luhmann のシステム理論を分析枠組みとして、境界の概念を規定した。

さらに大きな不足点があった。調査データを「越境」の概念で分析し分類した要素を、どのように再構築するかという問題である。部分の要素同士がどのような関係性を持ち、影響し合い、全体を構成しているかという構造化を行う必要があった。当初、境界の概念のもと

となったシステム理論を用い概念図を作成したが、非常に分かりにくいものであった。そもそも「越境」概念で分類された要素自体が抽象的である上、教育戦略システムも理解しにくい。より致命的なのは、継承語教育に関わる人々に分かりやすく答えを提示したいという当初の目的から大きく外れる。そこで、問いをさらに改善することにした。

以下は、継承日本語の国際学会で発表した論文の抜粋である。そこでは、当初の研究目的に立ち返り、「継承日本語教育をめぐる日本人母親の教育戦略はどのようなものであるか」という問いのもと、システムに代えて空間（場）を用い具体化を目指した。なお、空間（場）の大きさが「越境」の度合いを示し、矢印の太さが関係性の大きさを示している。先に取り上げたニッポン塾は「家庭外日本語日本文化空間」に含まれる。

北京在住の日本人母親を持つ日中国際結婚家庭の継承日本語教育戦略は、家庭の教育方針、日本語習得到達目標、こどもの言語状況、志向や将来展望と、どれをとっても一様ではない。しかし、「越境」という視点から捉えると、その教育戦略は図1の概念図として表すことができる。

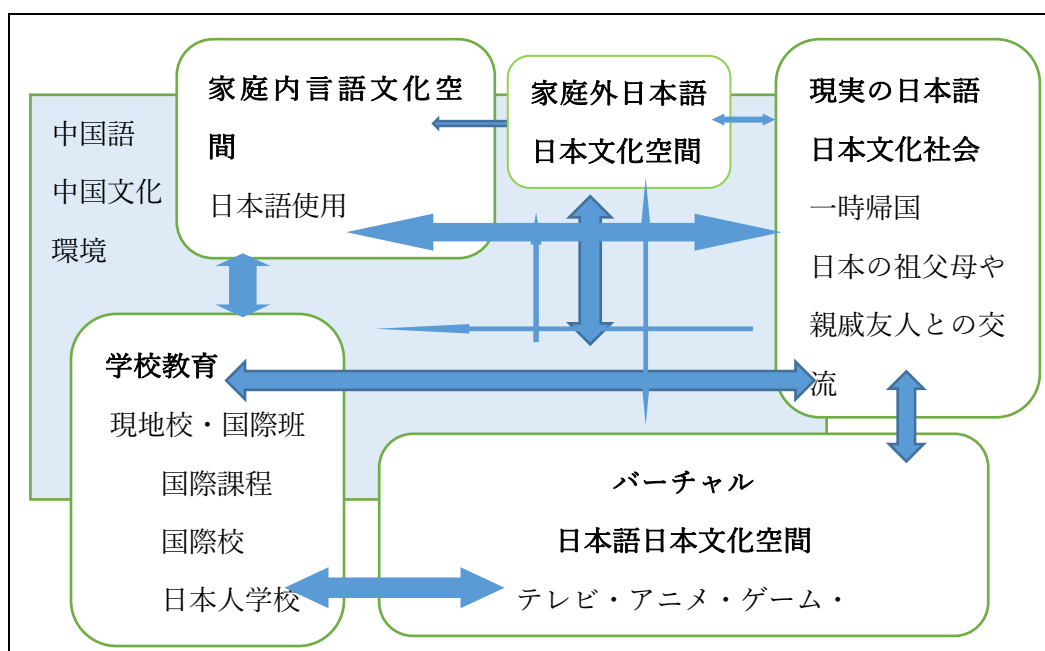


図1 「越境」から捉える中国語環境における継承日本語教育戦略概念図（筆者作成）

概念図では、継承日本語教育の過程において繰り返される「越境」を5つの空間（場）に分けて示したが、それぞれの空間での「越境」が単独で存在しているのではなく、相互作

用によって有機的に繋がっていることを矢印で強調している。それぞれの「越境」が相乗効果を持つことによって、言語資源が乏しい環境の中でもその効果を大きく発揮するものと考えられる。こうした「越境」の有機的な繋がりをアレンジすることが、継承語教育だけでなく、外国語教育にも求められているのではないだろうか。

7. 問いの本質

上記の論文発表で研究の問いも一区切りつき、しばらくは別の課題に関わっていたが、「海外の非日本語環境で、どうやって子どもの日本語ができるようになるのか」という当初の問いにはきちんと答えられていない不完全燃焼のような感覚が残っていた。その理由は、問いの本質にあると思われる。宮野 (2021) の言葉を借りれば、「なぜその問いがあるのか」という問いの根源的な存在を考えることである。グローバル化の進展に伴い人の移動が頻繁になったことにより、社会の非主流言語である親の母語を子どもに継承するということが問題化した。そのため親はどのようにすれば自分の母語を子どもに身に付けさせられるのかという立場で考えてきたが、裏を返せば、子どもは社会主流言語の環境のもとで親の母語を身に付けることが難しい、そして親が母語を子どもに継承させたいという願いがあるからこそ、この問題があると考えた。つまり親の教育戦略ではなく、親と子どもの関係という立ち位置に立つことで、問いに答えが出ると思われた。さらに、グローバル化がもたらした継承語問題だからこそ、さらにグローバル化による社会の変化もとりにこんで問いを設定すべきであろう。

そこで Hornberger (2007) の「トランスナショナル空間」の概念を用いる。この空間の中で、移民たちはトランスナショナルなリテラシーを通じて、自分自身を語りアイデンティティを構築する機会を得ると言う。日常的な「トランスナショナル空間」での活動参加が言語学習を促すのであれば、この空間は学習者にインタラクションを通じて言語文化資源を提供する場と定義できる。その上で問いは以下のように設定し、その答えを示す。

「問い」

2000 年代以降のインターネットの普及で海外でも日本のコンテンツが入手できるようになり移動や通信コストの低減化は、現実の日本の人や社会との繋がりをかつてないほど密接にしている。メディアやネットの仮想世界における豊富な言語資源と現実世界にお

ける日本の人や社会との密接な繋がりが、海外での日本語継承にどのような変化をもたらしているか。

北京・台北・香港に在住する日本語を継承する子どもたちが、仮想世界の言語資源、現実世界の言語資源をどのように活用しているのか、これらの言語資源はどのような関係にあるのかについて、明らかにすることを課題として設定する。

[答え]

仮想世界での体験が家庭内での日本語使用を増やし、家庭の日本語日本文化空間を広げていく。また仮想世界での体験が、一方で日本という現実世界への関心と呼び、他方で文字の世界へ誘い仮想世界をさらに拡大する。そして現実世界での体験が仮想世界での体験を、実感をともなった、より豊かなものにするのである。図 2 は、仮想世界と現実世界の言語資源の循環とトランスナショナルな実践を示したものである。

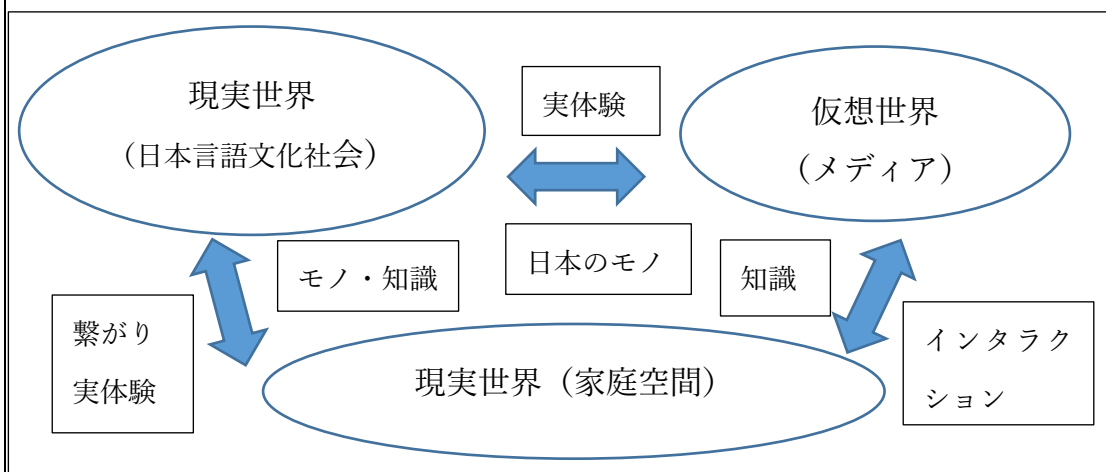


図 2 仮想・現実世界の言語資源の循環とトランスナショナルな実践 (筆者作成)

そして本調査の結果から、調査協力者の多くの母親に、インターネットに代表される仮想世界の言語資源を子どもと共有し、母子間の日本語使用に取り込もうとする努力が見られた。また定期的な一時帰国は母子の共通体験を通して、母子間の日本語使用を増やす。継承語を「親と子をつなぐ」(近藤 2019: 1) 言語と位置づける観点からも、多様なトランスナショナル空間の言語資源を「家庭言語」空間と循環させる工夫が必要である。このような言語資源の循環のためには、仮想世界—家庭空間—日本現実社会のネットワークを

うまくつないでトランスナショナルな環境を整えることが肝要である。

課題 2) 問いの本質を考えてみよう。その問いがなぜ生じたのか、問いの根源的な存在を念頭に、「なぜその問いがあるのか」問いを問い直してみよう。

8. まとめ

本章では、非社会学分野を研究する筆者が、研究の問いを鍛える過程で徐々に社会学の視点を研究に取り入れていった経緯を、稚拙な問いの段階から順を追って詳らかにした。研究を志すあなたたちも、筆者が経験した躓きや失敗に共感を覚えてくれるだろうと思う。このような躓きや失敗を重ね、失意と焦りを味わい、足掻きの中で希望を見出し、自分なりに問いを鍛えていった筆者の経験が、同じく研究を志すあなたたちに少しでも役立ってくれるよう願っている。

文献

- 安斎勇樹・塩瀬隆之, 2020, 『問いのデザイン 創造的対話のファシリテーション』学芸出版社.
- Hornberger, N. H., 2007, Bilingualism, transnationalism, multimodality, and identity: Trajectories across time and space. *Linguistics and Education*, 8(3-4): 325-334.
- 川上郁雄（編著）, 2009, 『海の向こうの「移動する子どもたち」と日本語教育 動態性の年少者日本語教育学』明石書店.
- 近藤ブラウン妃美, 2019, 「親と子をつなぐ継承語教育」近藤ブラウン妃美・坂本光代・西川朋美（編）『親と子をつなぐ継承語教育—日本・外国にルーツを持つ子ども』くろしお出版: 1-12.
- Luhmann, Niklas, 1984, *Soziale Systeme*, Suhrkamp (佐藤勉監訳, 1993, 『社会システム理論 上巻』恒星社厚生閣.)
- 宮野公樹, 2021, 『問いの立て方』筑摩書房.
- Mullaney, Thomas S. & Rea, Christopher, 2022, *Where Research Begins: Choosing a Research Project That Matters to You (and the World)*, Chicago: the University of Chicago Press, (安原和見訳, 2023, 『リサーチのはじめかた 「きみの問い」を見つけ、育て、伝える方法』2023, 筑摩書房.)
- 根川幸男, 2012, 「戦前期ブラジル日系移民子弟教育の先進的側面と問題点」森本豊富・根川幸男（編著）『トランスナショナルな「日系人」の教育・言語・文化—過去から未来に向かって—』明石書店: 54-75.

- 額賀美沙子, 2013, 『越境する日本人家族と教育: 「グローバル型能力」の育成の葛藤』 勁草書房.
- 志水宏吉・山本ベバリーアン・鍛冶致・ハヤシザキカズヒコ (編), 2013, 『「往還する人々」の教育戦略 グローバル社会を生きる家族と公教育の課題』 明石書店.
- 柳瀬千恵美, 2013, 「日本人母親と日中国際児の継承日本語—北京における継承日本語教育の軌跡と展望」『2013 年度母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究会 10 周年記念大会予稿集』 18-20.
- , 2014, 「越境する日中英マルチリテラシー育成—北京の日中国際結婚家庭の教育戦略—」『母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究会 2014 年度研究大会予稿集』 35-36.
- , 2016, 「トランスナショナルな継承日本語教育—北京在住日中国際結婚家庭の教育戦略—」 本田弘之・松田真希子 (編) 『複言語・複文化時代の日本語教育』 附属 CD-ROM, 凡人社: 4-13.
- , 2025, 「中華圏における日本語の継承とトランスナショナル空間—仮想世界と現実世界をつなぐ言語資源」 松永典子・郭俊海・柳瀬千恵美 (編) 『日本社会と継承語教育—多文化・多言語環境に育つ子どもたち』 九州大学出版会: 119-149.